

世界の舞台で活躍する日本人

[4] ファッションデザイナー フグラー和

日本人とスイス人のハーフ、被災地復興プロジェクト「東北グランマ」も支援

中東生

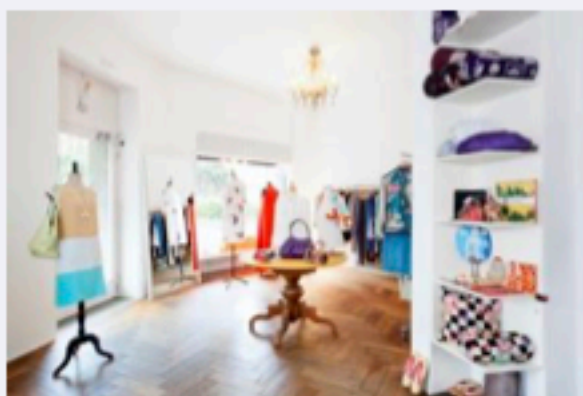
2014年12月27日

ソーシャルリンクをとばして、このページの本文エリアへ

日本人とスイス人のハーフとして生まれたフグラー和氏が、二つの国にルーツを持つ自分を表現する手法としてファッションデザイナーになって12年。和さんは東日本大震災の被災地復興プロジェクト「東北グランマ」（東日本大震災で被災したお母さん達のための仕事創りプロジェクト）も支援するなど、多様な活動を行っている。初のブライダル・コレクションも成功を収め「次なるステップを考えるのがクリスマス休暇の宿題」と意欲を見せる。

洋服をデザインする意義

日本人の母とスイス人の父の間に生まれた和さんは、11歳までを日本で過ごした。



フグラー和氏の作品が並ぶ店舗

スイスに渡ってからは現地のギムナジウム（中高一貫校）に通うが、異なる言語、そしてなによりコミュニケーションの取り方の違いに阻まれる。孤独を感じた時に、母親に扱いを教わったミシンの前に座るようになったという。

「日本とスイスという2つの国を自分の中で1つにしたかったのです。自分にしかない表現方法でそれを実現したかった。」と語る彼女は、大好きな

日本に戻るために慶應大学で美学美術史を専攻した。その後、東京で出会ったファブリック・フロントラインのシュトゥッツ社長の元で働くために、スイスに帰国する。

しかし、PRやマーケティングの部署に配属され、大好きな物作りから遠のいて行くことが辛かったという。「11歳から服を作り始め、ヴォーグなどを見ながら作った服を着ていた自分の表現方法は、服を作る事だ。日本とスイスの両国を故郷に持つ自分しか創れない服で、現代の女性像を表現したい」と、27歳で会社を辞め、本格的なデザインの勉強を始めたのだった。

まずはスイスで2年基礎を学び、その後ロンドンのセントラル・セント・マーティン・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインに3年留学する。卒業コレクションでいくつかの賞を同時に受賞し、そのプレスショーなどですぐにクライアントがつき、デザイナーとして華々しいデビューを飾る。

しかし、注目されてスタートしたキャリアは、挫折も多かった。「オーダーが沢山入って来ては、ガタッと落ちるという繰り返しでした。金銭的な事も苦手でした。自分が好きな物ばかり作っていると、売れないことに気づきました。突飛な洋服をデザインするのは楽しく、簡単な事です。しかし、使い勝手、耐久性、着心地などを考えなければ売れる物は作れません」

デザイナーとして存在し続けるためには年に2回、コレクションを発表する必要があるが、それにはお金もかかる。そのためにも洋服を売らなければならない。2度の出産直後もコレクションを休んだことはなかった。「良い物を作っていれば、多少休んでも大丈夫なのかもしれません。でも、自分のリズムを崩すことが怖かったので、何が何でも年2回はコレクションを発表し続けました」

子育てと仕事の両立はさぞ大変だろうと想像するが、自身が母親になってからは、作品を生み出す際にも「安産」になったという。

「創作活動というのは集中力が一番大切なんですね。子供を持つまでは時間が無限にあったので、生み出すまでに余計な時間がかかっていたようです。日常生活での発見、人との会話から得たことなど、情報は常に沢山入って来ます。それに母として感じる事を加え、ショーのアイデアや作品を短時間で生み出せるようになりました」

そんな試行錯誤を重ねながら12年が過ぎた。「スタートした頃、『3年やってダメだったらやめなさい』と周りに言われていましたが、1つのことは10年はやり続けてみないと分からないものですね。10年経った頃やっと、クライアントとも信頼関係が築かれていました」

ミシン3台を担いで東北グランマを支援

東日本大震災が発生した日は、スイスの和さんのお店に、被害情報と支援方法の問い合わせが殺到したという。ちょうど10日後にファッションショーが予定されていた。そこで「サイレント・オークション」（提示額と名前を紙に書いて掲げてもらい、制限時間が過ぎたらオークショナーが落札者の名前と決定額を公表する形のオークション）を行なうと、約300万円が集まった。

そのお金をただ現地に送るのではなく、自分の手で確実に何かを届けたい。特に子供達へのケアを考えた和さんは、Bernina社提供のミシン3台を担いで、岩手県教育委員会から「壊滅的被害を受けた」と聞いた陸前高田高校へ向かった。

そこで知ったのは、子供たちの生命力の強さだった。

「子供達には生き延びていく力があるのです。支えなければならぬのは大人でした。手作業は心を癒します。普段は口をきいてくれない子でも、一緒に縫っているうちに、色々話してくれるのです。『学校に居る間は元気だけれど、家に帰ると大変』という状況が一般的でした。全てを失い、狭い避難所や仮設住宅で生きていくと、お酒に溺れたり、家庭内暴力や親の自殺なども珍しくない話でした。そこで、まずは大人達が生き甲斐を取り戻せる仕事を提供したいと思ったのです」

活動を続けるうち、和裁士の及川さんをリーダーとする「東北グランマ」に出会い、ピンクッションや巾着袋をスイスで販売することになった。和裁パフォーマンスも開催した。現在は1つの段階を越え、次なる飛躍をねらっているところだという。

初のブライダル・コレクションが完成

「街中歩いたけれども、結婚式で着たいと思える服に出会えなかった」という声に応え、和さんはオートクチュールの花嫁衣装を多数作ってきた。それらの総まとめとして、初のブライダル・コレクションが完成し、スイスでは11月15日に、メルセデス・ベンツ主催のファッションショーでお披露目された。



🔍 ブライダル・コレクションのファッションショー

日本では11月25日にスイス大使館で発表され、どちらも大成功を収めた。6年前、彼女自身が結婚した時に着たスーツワンピースもこのコレクションに登場。2歳の長男を連れての結婚式だったので、同じ生地で作ったベビー用の衣装も発表した。

「現代の女性は、日常生活では自分のライフスタイルに合った服装を選んでいるのに、大切な結婚式に着る服は未だに『衣装』です。『自分自身の服』を着て結婚式を挙げないのはナンセンスだと思っていました。また、今年は日瑞友好150周年記念の大切な年なので、両国の融合＝結婚を祈念するブライダル・コレクションを発表することに大きな意義を感じていました」

前述の「東北グランマ」の活動にご興味を示されていた美智子皇后もおいでになられた。個人ショールームでも2日間発表し、その成果から来年は日本でも注文販売が始まる予定だ。

将来への展望を尋ねると「女性の未来を共に支えて行きたい。そして、日本とスイスが持つ、消えてはいけぬ、その国にしかない可能性を、テキスタイル産業を通して次世代につないでいきたい。」と答える和さんの信念は決してぶれない。

「このインタビューで、過去をまとめながら話しているうちに、これからしていかなければならない事が見えて来た気がします。『時間に追われるばかりではなく、私達にしかできないことを、していこうね』とお店のスタッフにも話したら、喜んでくれました」と語る彼女とともに、私達も日瑞の友情を次の200周年につなげていきたい。

和さんのサイト <http://www.kazuhuggler.com/>

東北グランマ <http://www.threecranesassociation.com>

ブライダル・コレクション VIMEO ONE-FIVE-0H

<http://vimeo.com/114353115>

[Global Press のサイトはこちら](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.